

2023年度 国語国文学専修 卒業論文ポスターセッション

# 笠金村「入唐使に贈る歌」論

国語国文学専修国文コース（村田ゼミ） 四年生 吉川由希子

## 目次

01. 対象作品・概要
02. 研究の方法と流れ
03. 第一反歌の考察
04. 贈答歌としての理解
05. まとめ

# 01：対象作品・作品の概要

## 01-1 対象作品

天平五年癸酉の春閏三月、笠朝臣金村、入唐使に贈る歌一首并せて短歌

- ① 玉だすき かけぬ時なく 息の緒に 我が思ふ君は うつせみの 世の人なれば  
大君の 命恐み 夕されば 鶴がつま呼ぶ 難波潟 三津の崎より 大舟に ま梶  
しじ貫き 白波の 高き荒海を 島伝ひ い別れ行かば 留まれる 我は幣引き  
斎ひつつ 君をば待たむ はや帰りませ(8・一四五三)

反歌

- ② 波の上ゆ 見ゆる小島の 雲隠り あな息づかし 相別れなば(8・一四五四)  
③ たまきはる 命に向かひ 恋ひむゆは 君がみ舟の 梶柄にもが(8・一四五五)

## 01-2 作品の概要

- ・ 万葉第三期の歌人、笠金村の作品
- ・ 長歌一首、反歌二首から成る
- ・ 天平五年（七三三）の遣唐使である男性を送る女性の歌

# 02：研究の方法と流れ

## 02-1 研究の方法

語や表現が、奈良時代の文献のなかでどのように使われているのか、どのような意味内容を示すものであるのか、用例を調べていくことで、作品内の表現の分析をおこなう。

## 02-2 研究の流れ

- ① 先行研究の調査
- ② 長歌のはじめから訓詁注釈を進める
  - 第一反歌の従来解釈に疑問を抱く。
  - 第一反歌についてさらに考察を重ねていく。

# 03：第一反歌の考察

## 03-1 通説

(女性) 波越しに 見える小島が 雲に隠れるように  
に あなたが見えなくなって ため息が出ることで  
しょう お別れしたら (『新編全集』現代語訳)

- ① 長歌に引き続き 女性の歌 である。
- ② 「波の上ゆ 見ゆる小島の 雲隠り」は「息づかし」の序で、遣唐使の男性が乗る船が遠ざかり見えなくなることの譬喩である。



通説の理解はかなり無理があるのではないか

# 03：第一反歌の考察

## 03-2 「小島」の分析 ※「小島」の用例は集中に五例。

- ① 荒磯ゆも まして思へや 玉の浦 離れ小島の 夢にし見ゆる (7・一ニ〇二)
- ② 雲隠る 小島の神の 恐けば 目は隔てども 心隔てや (7・一三一〇)
- ③ 水霧らふ 沖つ小島に 風をいたみ 舟寄せかねつ 心は思へど (7・一四〇一)

女性を譬える例はあるものの、船に譬える例はない。

## 03-3 「雲隠る」の分析 ※「見えていた対象物が見えなくなる」という意味で用いられる「雲隠る」は『万葉集』中に当該歌を除き四例。

- ① 汝が恋ふる 妹の命は 飽き足らに 袖振る見えつ 雲隠るまで (10・二〇〇九)
- ② 秋風に 大和へ越ゆる 雁がねは いや遠ざかる 雲隠りつつ (10・二一ニ八)

いずれの用例も、主体と対象物の距離が変化する。  
つまり、女性から見て、移動しない「小島」が「雲隠る」のはありえない。

# 03：第一反歌の考察

## 03-4 結論

第一反歌の〈話者〉は女性ではなく、男性なのではないか。  
→この理解だと、「小島」「雲隠る」の問題を解決することができる。

## 03-5 一首の理解

- ① 遣唐使の男性を話者とし、女性と別れた後のことを仮定的に歌う歌。
- ② 「小島」は出航後、男性が船の上からみる島のことを示す。見えていた「小島」が見えなくなり、女性との距離を実感することで、相手の不在を嘆く「あな息づかし」と歌われる。

# 04：贈答歌としての理解

当該作品は、長反歌の三首で贈答関係を構成している。

① 長歌 <女性> 「い別れ行かば」★



② 第一反歌 <男性> 「相別れなば」★  
「あな息づかし」☆



③ 第二反歌 <女性> 「恋ひむゆは」☆  
「君が御舟の梶柄にもが」

長歌では歌われなかった女性の直接的な心情表現が、男性の第一反歌の「あな息づかし」を受け取ることで、第二反歌ではじめて顕在化する。

# 05：まとめ

- ① 当該作品の第一反歌の話者は、女性ではなく男性である。
- ② 当該作品は、長反歌の三首で、女性→男性→女性という贈答関係を構成しているといえる。

## 参考文献

- 大浦誠士氏 「遣新羅使人歌群「當所誦詠古歌」の位相」（『美夫君志』七〇号二〇〇五年三月／『万葉集の様式と表現伝達可能な造形としての〈心〉』笠間書院二〇〇八年六月所収）
- 大濱眞幸氏 「大君の命かしくみ考」（『岐阜女子大学紀要』第十二号一九八三年七月）
- 梶川信行氏 「人麻呂からの離脱—金村の帰結—」（『万葉集論攷一』笠間書院一九七九年／『万葉史の論 笠金村』桜楓社一九八七年所収）
- 荻原千鶴氏 「入唐使に贈る歌」（『セミナー万葉の歌人と作品』第六巻和泉書院二〇〇〇年）
- 小田芳寿氏 「諸卿大夫等の難波に下る時の歌—「散り過ぎにけり」を手がかりに—」（『京都語文』第二十二号二〇一五年十一月）
- 垣見修司氏 「下にも長く汝が心待て—巻十三・三三〇五～三三〇九問答考—」（『万葉』二二六号二〇一八年十月／『万葉集巻十三の長歌文芸』和泉書院二〇二一年所収）
- 倉持しのぶ氏 「「息の緒に我が思ふ君は」—笠金村「入唐使に贈る歌」についての考察—」（『日本文学』六六巻五号二〇一七年五月）
- 中西進氏 「八世紀の万葉」（『万葉史の研究 中』桜楓社一九七二年）
- 朴喜淑氏 「万葉集の「タヅ」—遣新羅使人歌群の「タヅ」をめぐる—」（『萬葉語文研究』第8集和泉書院二〇一二年九月）
- 村山出氏 「山部赤人の恋—春思歌の成立—」（『国語国文研究』第七十六号一九八六年九月）